栗ヶ沢バプテスト教会　2025-07-27 主日礼拝説教

「神に喜ばれるささげもの」Ⅰペトロ 2：1-5

本日の聖書であるペトロの手紙一は、イエスの第一の弟子であった使徒ペトロの名前を借りて小アジアに住む離散のキリスト者たちに書き送った励ましの手紙であります。手紙の冒頭、1 章 1 節を読むと「イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に…仮住まいをしている人たちへ」と書かれています。これらの地名は、当時の小アジア、現在のトルコ領内にある地域の名称です。この手紙は、紀元 1 世紀から 2 世紀にはいる前後、すなわち AD90 年代から 100 年ごろに、ローマに在住する著者によって書かれました。この時代は、ヨハネの黙示録が書かれた時代とほぼ重なります。すなわち、ローマ皇帝によるキリスト教徒への迫害が激しくなった時代であります。そのような、迫害の激しい時代に小アジアで暮らす信徒たちを励まし、慰めるためにこの手紙は書かれたのです。

なぜ、ローマ皇帝はキリスト者たちを迫害したのか。これは、何年か前の東大の世界史の入試問題にも出題された、決して易しくはない問題です。わたしの高校生時代には、キリスト教徒たちがローマ皇帝を礼拝することを拒否したために、弾圧・迫害されたのだと教科書には書いていました。しかし、本村凌二というローマ史の研究家によると、ローマは、そもそも帝国内の住民に対して、皇帝を崇拝しろと言ったことはほとんどなかったといいます。ローマは帝国支配を進める中で、属州民の信仰に関しては、寛容でした。外来の宗教をほぼフリーパスで受け入れてきたのです。しかし、ローマがそのようにしたのは「あなたたちの宗教、神については自由に信じてよいから、逆にローマ人の信仰についても口を出さないでほしい」という思いがあったためだと、本村先生はいいます。ところが、キリスト教徒たちはユダヤ教の選民思想を捨て去って、民族や身分を超えてすべての人を救う神の愛を伝えようとしました。その結果、異なる信仰を持つ人にも「あなたの信じている神は本当の神ではない」「ほかの神を信じないで、わたしたちが信じる神を信じなさい」と言うようになった。そのために、キリスト教徒は弾圧されたのだと本村先生は言います。いわば、キリスト教は、格別に伝道的な宗教であった。それゆえに、キリスト教は弾圧され、また世界中に広がっていったのではないかと、本村先生は本の中で述べています。そうかもしれません。

ただ、信仰者であるわたしの目から見れば、当時のキリスト者たちがそのような行動に出た気持ちもわかるのです。何しろ、ギリシャやローマの神々をまつる神殿は、祭りのたびに宴会がおこなわれ、泥酔と享楽の場所となった。さらに神々を祀る神殿には大勢の娼婦たちがたむろし、公然と不品行や売春が行われていたのです。そのような、偶像礼拝にどっぷりつかった異教の神を信じる人に対して、キリスト者たちは聖書の神の聖さを訴えました。われわれの信じる神のほうがよいと、伝えずにはいられなかったのです。

本日の箇所の少し前の1章22節には、次のようなみ言葉があります。「あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい」　「偽りのない」と訳されている元のギリシャ語は、「仮面をかぶっていない」という意味です。古代ギリシャでは、劇場でさまざまな劇、とりわけ悲劇が演じられました。その劇を見て、悲しい場面では観衆の嗚咽する声が劇場内に響いたといいます。そのような悲劇を演じる際に、役者たちは仮面をかぶって舞台に登場しました。悲劇ですから悲しい場面を演じるわけですが、仮面をかぶっているため素顔は見えません。もしかしたら、仮面の下の素顔は笑っているかもしれない。そのように、本当の素顔を見せない役者のことをギリシャ語や英語で「ヒュポクリテース」といいました。「偽善者」と訳される言葉です。しかし、イエス・キリストを主と信じる者たちはそのような仮面を脱ぎ捨て、ありのままの自分、素顔の自分を神の前に見せるのです。わたしたちが「天にまします我らの父よ」と呼びかける神は、たしかに憐れみ深く慈愛に満ちたお方です。しかし、その神は同時に厳しさと公平さをもって人間を裁く神でもあります。神さまは、うわべや外見だけを見て良しとされるお方ではありません。わたしたちの心の中をご覧になるお方です。その偽りのない心をもって、神を礼拝することを求めておられるのです。

そこで、今日の箇所に入ります。1節を読みます。「だから、悪意、偽り、偽善、ねたみ悪口をみな捨て去って、」

とあります。これらは、人と人との麗しい関係を壊す働きをもっています。悪意とは、人のよいところを素直に認め、それを評価する肯定的な態度に水を差し、逆に人を貶め、マイナス面から見ようとする悪しき思いのことです。旧約聖書のヨブ記に登場するサタンが、その代表的な持ち主です。ウズの地にヨブという人がいました。ヨブは無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた人でした。また、常に悔い改めの礼拝をささげるという信仰の持ち主でした。主なる神は、そのようなヨブを見て、サタンに次のように言います。「お前はわたしの僕ヨブに気付いたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」つまり、神さまは手放しで、ヨブは立派な人物だ。地上に彼ほどの者はいないと持ち上げたのです。ところが、サタンはこれに反論します「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。…彼の財産に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません」　つまり、ヨブはを得るために信仰深く振舞っているのであって、決して立派な人間ではないとサタンは言う。ヨブを手放しでほめません。マイナス面を探し出し、粗さがしをして、どうやったら減点できるか、それだけをサタンは考えています。肯定的に見るのではなく否定的に見るのです。わたしたちの回りにも、このような人がいるのではないでしょうか。そのような悪意をみな捨て去りなさいと、本日の箇所でペトロは言います。人の良い点を認め、その人を悪く言わない。それは良い人間関係を作るための基本ではないでしょうか。

松下幸之助という人は、松下電機、今のパナソニックの創業者だった人物ですが、のちにＰＨＰなどの出版事業も行った人です。この松下さんが決して会おうとしなかった人がいたと言います。それは、人を悪口や愚痴を言う人でありました。松下さんは、人の悪口を言う人は、自分がいないところで自分のことまで悪く言っているのではないかと疑ってしまうと言います。併せて、そのような人の悪口をふんふんと聞くこともしないといいます。あの松下さんも、私の悪口に同意してくれたとなると、とんでもない尾ひれが付け加わることになります。陰口や悪口ほど、人の心を痛めるものはありません。そのような悪口を捨て去りなさいとペトロは説きます。

それに代わって、次のことをしなさいとペトロは言います。それが 2 節の言葉です。「生まれたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい」　　私事で恐縮ですが、6 月の初めに次女が女の子を出産しました。3330 グラムの女の子で、父方、母方どちらの家族も経験したことのない体重の子でした。その子がミルクを飲むのが大好きで、母乳では足りないと泣くのだそうです。そこで、追加のミルクを飲ませるとやっと泣き止むという。今 5000 グラムだと言いますが、ミルクを飲む時、いちばん幸せそうな顔をするそうです。わたしたちも、そんな乳飲み子のようにまじりけのない霊の乳を慕い求めなさいと、ペトロは言うのです。「混じりけのない」とは、有害なもの、必要でないものは含まないという意味です。わたしたちが耳にする言葉の中には、しばしば聞かなくて良いこと、有害な言葉が混じり込むものです。しかし、神の言葉はそうではありません。神の言葉は 100%完全に良いもので、そのみ言葉が、私たちの魂を養い育ててくれるのです。

4 節以下では、教会のことが書き記されています。イエス・キリストは人々から見捨てられたが、やがて隅の頭石になったお方であります。頭石とは土台になる石という意味です。わが国の木像建築で例えると、さしずめ大黒柱ということになります。「あなたがた自身も生きた石として用いられなさい」とあるのは、ひとりひとりが教会を建てあげるための、大切なの一部、建材なのですよということです。神さまがわたちしたちを教会へと招いてくださったのは、何かの目的があるからです。一人一人に、その人でなければ表せない個性、楽器で言えば、固有な音色があります。だから、ひとりひとりが大切なのです。かつて、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団の指揮者をつとめていたヘルベルト・フォン・カラヤンと言う指揮者がいました。ある時、まじかに迫った公演のリハーサルの途中でしたが、こう叫んだといいます。「ピッコロは、どこにいる？」　その場面で、主役となる楽器は「ピッコロ」でした。ご存じのように、ピッコロはオーケストラの中で一番小さな楽器です。しかし、そのピッコロがその小節では一番必要な楽器だったのです。神さまは、そのように一人一人を大切なパーツ（一部分）として用いられるのです。

こうして、本日の結びの言葉が 5 節に書かれます。「そして、聖なる祭司となって、神に喜ばれる霊的ないけにえをイエス・キリストを通してささげなさい」　ここで祭司と言う言葉が登場します。祭司には、二つの大きな役割、果たすべき務めがありました。第一は、人々

を神のもとへと導く働きです。ユダや教では、神によって選ばれた血筋の者が、神に近づくことができる聖別された者として、礼拝をつかさどる働きをしました。大祭司だけが、聖なる場所に入ることができたのです。しかし、新約聖書においては、イエス・キリストによって誰でも神に近づくことができるようになりました。キリスト者はだれでも、人々をキリストのもとへ導くことができるのです。ルターの万人祭司説は、本日の箇所が根拠になっています。

祭司のもう一つの役割、それは神にささげものをするという役割です。旧約聖書では、ささげものは動物の犠牲でしたが、新約聖書ではそれは霊的なささげものに代わりました。神が喜ばれるささげものとは、わたしたちの神への愛と、日常生活における奉仕です。なまなましい動物の血の犠牲ではない、わたしたちの真心と献身を神さまは喜ばれる。その奉仕の中でも一番の奉仕は、礼拝に出席することです。英語で礼拝をサービスというのは、まさにそのことを指しています。今、ここにあなたがいること、神さまはそのことを喜ばれるのです。キリスト者は礼拝を神へのささげものとするのです。教会とは建物のことではありません。わたしたち一人一が教会なのです。わたしたちは、日々の生活を通して、神がわたしたちに与えてくださる恵みのわざを人々に証しするのです。

お祈りいたします。